

魔法鑼

泉鏡太郎

青空文庫

峰は木の葉の虹である、谷は錦の淵である。……信濃の秋の山深く、霜に冴えた夕月の色を、まあ、何と言はう。……流は銀鱗の龍である。

鮮紅と、朱鷺と、桃色と、薄紅梅と、丹と、朱と、くすんだ樺と、冴えた黄と、颯と點滴る濃い紅と、紫の霧を山氣に漉して、玲瓏として映る、窓々は恰も名にし負ふ田毎の月のやうな汽車の中から、はじめ遠山の雲の薄衣の裾に、ちらく和白く、つめたひか衝と冷く光つて走り出した、其の水の色を遙に望んだ時は、錦の衾を分けた仙宮の雪の兎と見た。

尾花も白い。尾上に遙に、崖に靡いて、堤防に残り、稲束を縫つて、莖も葉も亂れ亂れて其は蕎麥よりも赤いのに、穂は夢のやうに白い幻にして然も、日の名残が、月影か、晃々と艶を放つて、山の袖に、懐に、錦に面影を留めた風情は、山嶽の色香に思を砕いて、戀の棧橋を落ちた蒼空の雲の餘波のやうである。

空澄んで風のない日で、尾花は静として動かかなかつたのに。……

胡粉ごふんに分れた水みづの影かげは、朱しゆを研とぐ薬研やげんに水銀すゐぎんの轉まろぶが如ごとく、衝つと流ながれて、すら〜と
 糸いとを曳ひくのであつた。

汽車きしやの進すすむに連つれて、水みづの畝うねるのが知しれた。……濃こき薄うすき、もみぢの中なかを、霧きりの隙ひまを、
 次第しだいに月つきの光ひかりが添そつて、雲くもに吸すはるゝが如ごとく、眞まつ蒼さな空そらの下したに常磐木ときはぎの碧あをきがあれば、
 其處そこに、すつと浮立うきたつて、音おともなく玉散たまちす。

窓まどもやゝ黄昏たそがれて、村むら里ざとの柿かきの實みも輕かるくぼら〜と紅くれなゐの林やしに紛まぎれて、さま／＼のも
 のの緑みどりも黄色きいろに、藁わら屋根やねの樺かばなるも赤あかい草くさに影かげが沈しづむ、底澄そこすむ霧きりに艶つやを増まして、露つゆもこぼ
 さす、霜しもも置おかず、紅べにも笹さ色の粧まを凝こらして、月げ光つくわうに溶とけて二葉ふたは三葉みは、たゞ紅べにの點滴したた
 る如ごとく、峯みねを落おちつつ、淵ふちにも沈しづまず翻ひるがへ。

散ちる、風かぜなくして散ちる其そのもみぢ葉はの影かげの消きゆるのは、棚田たなだ、山田やまだ、小田をだの彼方あちこち此方きぬた、砧たね
 の布ぬののなごりを惜をしんで徜徉さまよふ状さまに、疊たまれもせず、靡なびきも果はてないで、力ちからなげに、すら〜
 と末廣すゑひろがりに細ほそくイむ夕ゆふの煙けむりの中なかである。……煙けむりの遠とほいのは人ひとかと思みゆる、山やまの魂たましひか
 と見みゆる、峰みねの妾めかけかと思みゆる、狩かり暮くらし夕ゆふ霧ぎりに薄うすく成なり行ゆく、里さとの美た女をよめの影かげかとも
 視ながめらるゝ。

水みづある上うへには、横よこに渡わたつて橋はしとなり、崖がけなす限くまには、草くさを潜くゞつて路みちとなり、家いへある軒のきに

は、斜めに繞つて暮行く秋の思と成る。

煙は靜に、燃ゆる火の火先も宿さぬ。が、南天の實の溢れたやうに、ちらくくと其の底に映るのは、雲の茜が、峰裏に夕日の影を投げたのである。

此の紅玉に入亂れて、小草に散つた眞珠の數は、次等々々照増る、月の田毎の影であつた。

やがて、月の世界と成れば、野に、畑に、山懷に、峰の裾に、遙に炭を焼く、それは雲に紛ふ、はた遠く筑摩川を挾んだ、兩岸に、すらくと立昇るそれ等の煙は、満山の冷き虹の錦の裏に、擬つて霜の階と成らう。凍てて水晶の圓き柱と成らう。

……

錦葉の蓑を着て、其の階、其の柱を攀ぢて、山々、谷々の、姫は、上藤は、美しき鳥と成つて、月宮殿に遊ぶであらう。

木の葉は夜の虹である、月の錦の淵である。

此の峰、此の谷、怒る思。紅の梢を行く汽車さへ、轟きさへ、音なき煙の、雪なす瀧をさかのぼつて、軽い群青の雲に響く、幽なる、微妙なる音楽であつた。

驛員が黒く流れて、

「姨捨！姨捨！」……

二

「失禮、此處は一體何處なんですか。」

「姨捨です。」

五分間停車と聞いて、昇降口を、峠の棧橋のやうな、雲に近い、夕月のしら／＼とあるプラツトフォームへ下りた一人旅の旅客が、恍惚とした顔をして訪ねた時、立會せた驛員は、……慙う答へた。が、大方睡から覺めたものが、覺束なさに宿の名に念を入れたものと思つたらう。

「姨捨です。」

「成程。」

と胸に氣を入れたやうに頷いて云つたが、汽車に揺られて來た聊かの疲勞も交つて、山の美しさに魅せられて身の萎々と成つた、歎息のやうにも聞えた。

實際、彼は驛員の呼び聲に、疾く此の停車場の名は聞いて心得たので。空も山

も、餘りの色彩に、我は果して何處にありや、と自ら疑つて尋ねたのであつた。

「何とも申しやうがありません。實にいゝ景色の處ですな。」

出入りの旅客も僅に二三。で、車室から降りたのは自分一人だつた彼に、海抜二千尺の峰に於けるプラツトフォームは、恰も雲の上に拵へた白き瑪瑙の棧敷であるが如く思はれたから、驛員に對する挨拶も、客が歡迎する主人に對して、感謝の意を表するが如きものであつた。

心は通ずる、驛員も、然も満足したらしい微笑を浮べて、

「お氣に入りました結構です、もみぢを御見物でございますか。」

と半ば得意の髯を揉む。

「否、見物と申すと、大分贅澤なやうで。」

と、彼は何故か懐中の見える、餘り工面のよくない謙遜の仕方だ、

「氣紛れに御厄介を掛けますのです。しかし、觀光の客が一向に少いやうでござ

いますな、此だけの處を。」

「はあ……」と一寸時計を見ながら、

「雜と十日ばかり後れて居ますです。最う雪ですからな。風によつては今夜にも眞白に

成りますものな。……尤も出盛りの旬だと云つても、月の頃ほどには來ないのでしてな。」

「あゝ、其の姨捨山と云ふのは孰れでございます。」

「裏の此の山一體を然う云ふんださうです。」

と來合せて立停つた、色の白い少年の驛夫が引取る。

手届く其の山懷に、蔽ひかさなる錦葉の蔭に、葉の眞赤な龍膽が、ふさくと二

三輪、霜に紫を凝して咲く。……

途すがらも、此の神祕な幽玄な花は、尾花の根、林の中、山の裂けた巖角に、軽く

藍に成つたり、重く青く成つたり、故と淺黄だつたり、色が動きつつある風情に、人に其

の生命あることを知らせ顔に装つた。そして、下界に降りて、峰を、原を、紫の星が微

行して幽に散歩する俤があつたのである。

「月見堂と云ひますのは。」

「彼處が其です。」と、少年の驛夫が指す。

其の錦の淵に、霧を被けて尾花が縁とる、緋の毛氈を敷いた築島のやうな山の端に、

もの珍しく一叢の緑の樹立。眞黄色な公孫樹が一本。篝火焚くか、と根が燃えて、

眞紅の梢が、ちらりと夕の茜をほとばしらす。

道々^{みちく}は、峰^{みね}にも、溪^{たに}にも、然^さうした處^{ところ}に野社^{のやしろ}の鳥居^{とりゐ}が見^みえた。
こゝには、銀^{ぎん}の月^{つき}一輪^{いちりん}。

三

「空^{そら}の色^{いろ}が潭^{ふち}のやうです、何^{なん}と云^いつたら可^いいでせう。……碧^{あを}とも淺黄^{あさぎ}とも薄^{うす}い納戸^{なんど}とも、……」

月^{つき}が山^{やま}々^{まく}に曳^ひいた其^その薄衣^{うすぎぬ}を仰^{あふ}ぐ時^{とき}、雲^{くも}の棧橋^{かけはし}に立^たつ思^{おも}ひがした。
再^{ふた}び見^みた時^{とき}計^{けい}を納^{をさ}めて、

「あれへ御^ご一泊^{いつぱく}は如何^{いかゞ}です。」

目^めの下^{した}の崖^{がけ}の樹^この間に、山鳥^{やまどり}が吐^はいた蜃氣樓^{しんきろう}の如^{ごと}き白壁^{しろかべ}造^{づくり}、屋根^{やね}の石^{いし}さへ群^{ぐんじ}
青^{やう}の岩^{いは}の斷片^{かけら}を葉^はに散^ちらす。

唯^{とみ}見^みると、驛員^{えきゐん}は莞爾^{くわんじ}として、機關車^{きくわんしや}の方^{ほう}へ、悠然^{いうぜん}として霧^{きり}を渡^{わた}つた。

「や、出^でますな。」

衝^つと列車^{れつしや}に入^はつた時^{とき}、驛夫^{えきふ}の少年^{せうねん}は車^{くるま}の尾^をへ駈^かけて通^{とほ}る。

笛は咎す、一鳥聲あり、汽車はするくと艶やかに動き出す。

窓で、彼が帽を脱ぐのに、驛員は舉手して一揖した。

霧が掠れて、ひたくと絡ひつく、霜かと思ふ冷さに、戸を引いたが、彼は其の硝子に面をひたと着けたまゝ、身動きもしないで尚ほ見惚れた。

筑摩川は、あとに成り行く月見堂の山の端の蔭から、月が投げたる網かと思える：

：汽車の動くに連れて、山の峽、峰の谷戸が、田をかさね、畝をかさねて、小櫻、緋

緋、萌黄匂、櫛匂を、青地、赤地、蜀紅など錦欄の直垂の上へ、草摺

曳いて、さつくくと鎧ふが如く線擴がつて、人の倂立昇る、遠近の夕煙は、

紫籠めて裾濃に靡く。

水は金銀の縫目である。川中島さへ遙に思ふ。

「長野で辨當を買った時に情なかつた。蓮に人參に臭い牛肉、肴と云ふのが生焼

の鹽引の鮭は弱る。……稗澤山もそくの、ぼんぼち飯、あゝ旅行はしなけれ

ば可かつたと思つた。

いや、贅澤は云ふまい、此の景色に對しては恐多いぞ。」

「伺ひます。」

あるステーション
 一停車場で、彼の隣に居た、黒地の質素な洋服を着て、半外套を被つて、鳥打を被つた山林局の官吏とも思ふ、痩せた陰氣な男が、薄暗い窓から顔を出して、通かかりの驛員を呼んで聞いた。

「伊那へは、此の驛から何里ですな。」

「六里半、峠越しで、七里でせう。」

「しますと、次の驛からだと如何なものでせう。」

「然やう……おいしく。」

呼ぶと、驛員が駈けて來た。まだ宵ながら靴の音が高く響く。……改札口に人珍しげに此方を透かした山家の小兒の乾栗のやうな顔の寂しさ。

「……驛からだど伊那まで何里かね。」

「山路六里……彼は七里でございます。」

「は、あ、」と歎息するやうに云つた時の、旅客の面色も四邊の光景も陰々たるものであつた。

「俾はありませうか。」

「ございます。」

と驛夫が答へた。

「次の驛には、」

「多分ございませう、一臺ぐらゐは。」

「否、此處で下ります。」

と思沈んだのが、急に慌しげに云つて、

「此處で下ります。」

と、最う一度自ら確めるやうに言ひ加した。

驛員等は衝と兩方へ。

旅客は眉を壓する山又山に眉を蔽はれた状に、俯目に棚の荷を探り取つたが、笛の鳴る時、角形の革鞆に洋傘を持添へると、決然とした態度で、つかくと下りた。

下り際に、顧みて彼に會釋した。

健康を祈る。

四

となり、隣に居た其の旅客は、何處から乗合せたのか彼はそれさへ知らぬ。其上、雙方とも、もの思ひに耽つて、一度も言葉は交さなかつたのである。

雖然、いざ、分れると成れば、各自が心寂しく、懐かしく、他人のやうには思はなかつたほど列車の中は人稀で、……稀と云ふより、殆ど誰も居ないのであつた。

彼は、單身山又山を分けて行く新しい知己の前途を思つた。蜀道礪として轉た世は嶮なるかな。

孤驛既に夜にして、里程孰れよりするも峠を隔てて七里に餘る。……彼は其の道中の錦葉を思つた、霧の深さを思つた、霜の鋭さを思つた、寧ろ其よりも早や雪を思つた、……

：外 套 黒く沈んで行く。……

月が晃々と窓を射たので、憂然と玉の函を開いたやうに、山々谷々の錦葉の錦は、照々と輝を帯びて颯と目の前に又巻絹を解擲げた。が、末は仄々と薄く成り行く。渚の月に、美しき貝を敷いて、あの、すら／＼と細く立つ煙の、恰も鷗の白き影を岬に曳くが如く思はれたのは、記憶が返つたのである。

汽車は山の狭間の左右に迫る、暗き斷崖を穿つて過ぎるのであつた。窓なる峰に、星を貫く、高き火の見の階子を見た。

ひとつやともしびかけ
 孤家の灯の影とても、落ちた木の葉の、幻に一葉紅の俤に立つばかりの明さへ無い。
 岩を削つて点滴る水は、其の火の見階子に、垂々と雫して、立ちながら氷柱に成らむ、
 と冷かさの身に染むのみ。何處に家を焼く炎があらう。
 暁の霜を裂き、夕暮の霧を分けて、山姫が撞木を當てて、もみぢの紅を里に響か
 す、樹々の錦の知らせ、と見れば、龍膽に似て俯向けに咲いた、半鐘の銅は、月に
 紫の影を照らす。

大なる蝙蝠のやうに、煙がむらむらと隙間を潜つた。

「あゝ、隧道へ入つた。」

人も知つた……此の隧道は以ての外鎖がある。普通我國第一と稱へて、（代天
 工）と銘打つたと聞く、甲州笹子の隧道より、寧ろ此の方が長いかも知れぬ。

はじめは、たゞあまりに通過ぎるつもりで、事とも爲なかつたばかりで無い。一向、
 此の變則の名所に就いて、知識も經驗も無かつた彼は、次第に暗く成り、愈々深
 くなり、もの凄じく成つて、揺れく轟然たる大音響を發して、汽車は天窓から、
 鈍き錐と變じて、山の底に潜込むが如き、易からぬものの氣勢に、少からず驚かさされた
 のである。

「此は難所だ。」

美人に見惚るゝとて、あらゆる事か、ぐつたり鏡臺に凭掛つたと云ふ他愛なき。で、腰掛に上り込んで、月の硝子窓に、骨を抜いて凍付いて居たのが、慌てて、向直つて、爪探りに下駄を拾つて、外套の下で、ずるりと弛んだ帯を緊めると、襟を引掻合せる時、袂へ這つて宙に留まつた、大切な路銀を、ト懐中へ御直り候へと据直して、前褌をぐい、と緊めた。

「いや、なかくだぞ、尚だ。……」

汽車は轟々と、唯瀧に捲かれた如くに響く。

此處で整然として腰を掛けて、外套の袖を合せて、一つ下腹で落着いた氣が、だらしもなく續けざまに噎せ返つた。

煙が烈しい。

五

室内一面濛々とした上へ、あくどい黄味を帯びたのが、生暖い瀬を造つて、む

くく泡を吹くやうに、……獅嚙面で切齒つた窓々の、隙間と云ふ隙間、天井、
 廂合から流込む。

噂も知らなかつた隧道が此だとすると、音に響いた笹子は可恐しい。一層中仙道を
 中央線で、名古屋へ大りをしようかと思つたくらゐ。

「何にしる酷いぞ、此は……毒を以て毒を制すと遣れ。」

で、袂から巻蓑を取つて、燐寸を摺つた。口の先に※と燃えた火で勢付いて、
 故と煙を深く吸つて、石炭臭いのを浚つて吹出す。

目もやゝ爽かに成つて、吻と呼吸をした時——ふと、否、はじめてと言はう、——彼が
 掛けた斜に、向う側の腰掛に、畳まり積る霧の中に、落ちて落かさなつた美しい影を見
 た。

影ではない、色ある衣の媚かしいのを見たのである。

「女が居る。」

然も二人、……

と認めだが、菱々として、兩方が左右から、一人は一方の膝の上へ、一人は一
 方の、おくれ毛も亂れた肩へ、袖で面をひたと蔽うたまゝ、寄継り抱合ふやうに、

俯伏しに成つて惱ましげである。

姿を、然うして撓やかに折重ねた、袖の色は、濃い萌黄である。深い紫である。いづれも上に被た羽織とは知れたが、縞目は分らぬ。言ふまでもなく紋があらう。然し、煙に包まれて、朦朧としてそれは見えぬ。

小袖も判然せぬ。が、二人とも紋縮緬と云ふのであらう、絞つた、染んだやうな斑点のある緋の長襦袢を着たのは確で、揃み合つた四つの袖から、萌黄と其の紫とが彩を分けて、八ツにはらくと亂れながら、しつとりと縫れ合つて、棲紅に亂れし姿。……其の然も紅は、俯向いた襟を迂り、凭れかゝつた衣紋に崩れて、膚も透く、とちらめくばかり、氣勢は沈んだが燃立つやう。

ト其の胸を、萌黄に溢れ、紫に垂れて、伊達巻であらう、一人は、鬱金の、一人は朱鷺色の、だらり結びが、ずらりと摩く。

「おや／＼女郎かな。」

雖然、襦袢ばかりに羽織を掛けて旅をすべき所説はない。……駈落と思ふ、が、頭巾も被らぬ。

顔を入違ひに、肩に前髪を伏せた方は、此方向きに、やゝ俯向くやうに紫の袖で蔽

ふ、がつくりとしたれば、陰に成つて、髪かみの形は認められず。

其その、膝ひざに萌黄もえぎの袖そでを折掛をりかけて、突俯つゝぶした方は、絞しほりか鹿かの子こか、ふつくりと緋ひ手柄てがらを掛かけた、もつれ毛げはふさふさくと揺ゆれつつも、煙けむりを分わけた鬢びんの艶つや、結ゆひわた綿わたに結ゆつて居ゐた。

此この女をんなが上うへに坐すわつて、紫むらさきの女をんなが、斜なめになよよと腰こしを掛かけた。落おとした裳もすそも、屈かめた褻つまも、痛いた々くしいままで亂みだれたのである。

年とし紀きのころは云いふまでもない、上うへに襲かねた衣きぬばかりで、手て足あしも同おなじ白しろさと見みるまで、寸す分ぶん違ちがはぬ脊せ丈たけ恰かつ好かう。

……と云いふ、其その脊せ丈たけ恰かつ好かうが？……

六

「見み世せものなに成をんる女をんなぢやないか。」

一ひと度ど、然さう思おもつたほちひど小ちひさかつた。

が、いぢけたのちひでも縮ちぢんだのちひでもない。吹ふ込きこむ煙けむりに惱なうらん亂らんした風ふ情ぜいながら、何ど處こか水みづ々つりあとして伸のびやかに見みえる。襟えり許もと、肩かた附つき、褻つまはづれも尋じん常じやうで、見み好よげに釣つり合あふ。

小さいと云ふより、……小造りに過ぎるのであった。

汽車は倒に落ちて留まない。煙が濃いのが岩を崩して、泥を掻き、波のやうな土を煽つて、七轉八倒あがき悶ゆる。

俗に、隧道の最も長いのも、ゆつくり吸つて敷島一本の間と聞く。

二本目を吸ひつけた時、彼は不安の念を禁じ得ないのであった。……不思議な伴侶である。姿に色を凝らした、朦朧とした女の抱合つた影は、汽車に事變のあるべき前兆ではないのであらうか。

嘗て此の隧道を穿ちし時、工夫が鶴背、爆裂弾の殘虐に掛つた、弱き棲主たちの幻ならずや。

或は此の室にのみ、場所と機會に因つて形を顯す、世に亡き人の怨靈ならずや。

と、誘はれた彼も、ぐらくと地震ふる墓の中に、一所に住んで居るもののやうな思ひがして、をかしいばかり不安でならぬ。

静坐するに堪へなく成つて、急に衝と立つと、頭がふらくとしてドンと尻もちをついて、一人で苦笑した。

ふと大風が留んだやうに響が留んで、汽車の音は舊に復つた。

かれあわたゞ 彼は慌しく窓を開いて、呼吸のありたけを口から吐出すが如くに月を仰ぐ、と澄切つた山の腰に、一幅のむら尾花を殘して、室内の煙が透く。それが岩に浸込んで次第に消える。

ゆめ 夢から覺めた思ひで、厚ぼつたかつた顔を撫でた、其の掌を膝に支いて、氣も判然とむきなほ 向直つた時、彼は今までの想像の餘りな癡けさに又獨りで笑つた。

いや、知己でもない女の前で、獨笑は臍の業であらう。

めいはい 冥界の伴侶か、墓の相借家か、とまで怪しんだ二人の女が、別條なく、然も、揃つて美しい顔を上げて居たから。

「矢張り隧道に惱んだんだ。」

と彼は頷いたのであつた。

「そして、踊……踊の歸途……憊う着崩した處を見ては、往路ではあるまい。踊子だらう。後の宿あたりには何か催しがあつて、其處へ呼ばれた、なにがし町の選ぬきとでも言ふのが、一つ先か、それとも次の驛へ歸るのであらう。……踊の催しと言へば、園遊會かなんぞで、灰色の手、黄色い手、樺色の手の、鼬、狐、狸、中には熊のやうなものも交つた大勢の手に、引され、搦立てられ、袖も振も亂れたまゝを汽車に乗つた落

ちうど
人らしい。」

落人おちうどと云へば、踊つた番組ばんぐみも何か然うした類たぐひかも知れぬ。……其の紫そむらさきはうの方は、草くさた

東ねの島田しまだとも見えるが、房ふつさりした男をとこまげ鬘むすめに結ゆつて居たから。

此方このほうは、やゝ細ほそおもて面おもてで。結綿ゆひわたの娘むすめは、ふつくりして居る。二人ふたりとも鬘かつらを被かぶつたかと思ふ。

年とし紀わかが少すくい、十三四じゅうさんしよか、それとも五六ごろう、七八しちぱちか、眦めじりに紅べにを入れたらしいまで極彩ごくさい

色しきに化粧けしやうしたが、烈はげしく疲つかれたと見えて、恍惚うつとりとして頬ほに蒼味あをみがさして、透通すきとほる

ほど色いろが白しろい。其の紅べにと思ふ臉おもの紅まぶがなかつたら、小柄こがらではあるし、たゞ動うごく人形にんぎやうに

過すぎまい。

七

「何なにしろ弱よわつたらしい。……舞臺ぶたいの歸途かへりとして、今いまの隧トン道ネルを越こすのは、芝居しばゐの奈落ならくを潜くぐるやうなものだ、いや、眞個まったくの奈落ならくだつた。」

——心こゝろ細ほそいよ木曾路きそぢの旅たびは

笠かさに木この葉はが舞まひかゝる——

人形にんぎやうのやうな此この女達をんなたち、聲こゑを聞ききたい、錦葉もみぢに歌うたふ色鳥いろどりであらう。

まだ全まく消きえ果はてない煙けむりを便よ宜すがに、あからめもしないで熟ちつと視みる時とき、女をんなは二人ふたり、揃そろつて、目めを睜みつて、四よつつの目めをぱつちりと瞬またきした。……瞳ひとみは水す晶あしを張はつたやうで、薄うすけむ煙りの室しつを透とほして透すき通とほるばかり、月つきも射さ添そふ、と思おもふと、紫むらさきも、萌も黄えぎも、袖そでの色いろが※と汚さえて、姿すがたの其そこ處こゝ、燃も立えたつ緋ひは、炎ほのほみだ

すつかと立たち揚あつた大漢子おほをのこがある。

先さきに——七里半りはんの峠たうげを越こさうとして下おりた一見いつけんの知己ちぎが居あいた、椅子いすの間あひだを向むかへ隔へだて、彼かれと同おなじ側かはの一隅ひとすみに、薄うす青あい天鵝絨びろうどの凭掛よりかを枕りまくらにして、隧トンネル道みちを越こす以前いぜんから、夜よるの底そこに沈しづんだやうに、煙けむりに陰いん々くとして横よこ倒たふれに寐ねて居あいたのが、此この時とき仁王立にわうだちに成なつたのである。

が、唐突だしぬけに大おほき木ぎが化ばけて突つつたて、手足てあしの枝えだが生はえたかと疑うたはる。

茶ちやの鳥打とりうちをずぼりと深ふかく、身みの丈たけを上うへから押お込こんだ體ていに被かつたのでさへ、見み上あげるばかり脊せがたかい。茶羅紗ちやらしや霜降しもふりの大おほ外ぐわ套いたうを、風かぜに向むかつた蓑みのよりも擴ひろく裾すそ一いっ杯ぱいに着きて、赤革あかぐはの靴くつを穿はいた。

時ときに斜はすつか違ちがひにづかりと通とほつて、二人ふたりの女をんなの前まへへ會あひ釋しやくもなくぬつくと立たつ。卜紫むらさきの目め

が、ト其の外、套の脇の下で、俯目に成つたは氣の毒らしい。——紅は萎む、萌黄の八ツ口。

大漢子の兩手は、伸をして、天井を突抜く如く空ぎまに棚に掛る、と眞先に取つたのは、彈丸帶で、外套の腰へぎしりとゞ《し》め、續いて銃を下ろして、ト筈高にがツしと掛けた。大な獲もの袋と、小革靴と一所に、片手掴みに引下したの革紐の魔法罫。

で、一揺り肩を揺つて、無雜作に、左右へ遣違へに、ぎくりと投掛ける、と腰でだぶりと動く。

獲もの袋が重さうに、然も發奮んで揺れた。

——山鳩七羽、田嶋十三、鶉十五羽、鴨が三羽——

づしりと其の中にあるが如くに見て取られる。……

昨日、碓氷で汽車を下りて、峠の權現様に詣でた時、さしかゝりで俵を下りて、あとを案内に立つた車夫に、寂しい上坂で彼は訊ねた。

「些とも小鳥が居ないやうだな。」

「搜すと居ります。……昨日も鐵砲打の旦那に、私がい、お供で、御案内でい、

立派に打たせましたので。」

と狡しげな目を光らして云つた。鳴も鳩も、——此處に其の獲ものの数さへ思つたのは、車夫が其の時の言葉の記憶である。

此の山里を、汽車の中で、殆ど鳥の聲を聞かなかつた彼は、何故か、谷筋にあらゆる小禽の類が、此の巨な手の獵人のために狩盡されるやうな思ひして、何となく悚然とした。其も瞬時で。

汽車は留まつた。

「鹽尻、鹽尻——中央線は乗換。」

其の途端である。……鷹揚に、然も手馴れて、迅速に結束し果てた紳士は、其の爲に空しく待構へて居たらしい兩手にづかりと左右、其の二人の女の、頸上と思ふあたりを無手と掴んで引立てる、と、呀？ 衣も扱帯も上へ摺つて、するりと白い顔が襟に埋つた、紫と萌黄の、緋を流るゝやうに宙に掛けて、紳士は大跨にづかりく。

呆氣に取られた彼を一人室内に残して、悠然と扉を出たのである。

あとの、もの凄さ。

八

紅べにさいた二ふたツの愛あい々々しい唇くちびるが、凍いてて櫻さくら貝がひの散ちつて音おとするばかり、月つきにちらく
と、それ、彼處あそこに此處ここに――

「あゝ、寒さむい。」

温泉をんせんに行ゆかうとして、菊屋きくやの廣袖びとらに着換きかへるに附つけても、途中とちゆうの胴震どうぶるひの留とまらな
かつたまで、彼かれは少すくなからず怯おびかされたのである。

東とうきやう京きやうを出程たつ時ときから、諏訪すはに一泊ぱくと豫定よていして、旅籠屋はたごやは志こした町まち通とほりの其その菊屋きくや
であつた。

心こころ細ほそい事ことには、鹽尻しほじりでも、一人ひとりも同おなじ室しつへ乗のり込まなかつた。……其その宿しゆくの名なは、
八重垣やへがき姫ひめと、隨筆ずゐひつの名なで、餘所よそながら、未見みけんの知ち己き。初對面しよたいめんの從いと姉妹とこと、伯父おぢさんぐ
らゐに思おもつて居ゐたのに。……

下諏訪しもすはへ來くると、七八人にん、田螺たにしを好すきさうな、然しかも娑婆しやば氣つけな商人風あきんどふうのが身みを光ひからし
て、ばらくと入はひつて來きた。其その中なかで一人ひとり、あ、其その女をんな二人居たりた處ところへ、澄すまして腰こしを掛か
けた男をとこがあつた。

はつと思つたが、一向平氣で、甲府か飯田町へ乗越すらしい。上諏訪に彼が下車した時まで、別に何事もなく、草にも樹にも成らず、酒のみと見えて、鼻の尖の赤いのが、其のまゝ柿の實にも成らないのを寧ろ怪む。

はじめ、もう其のあたりから、山も野も眇として諏訪の湖の水と成る由、聞いては居たが、ふと心着かずに過ぎた、——氣にして、女の後ばかり視めて居たので。

改札口を冷く出ると、四邊は山の陰に、澄渡つた湖を包んで、月に照返さるゝ爲か、漆の如く艶やかに、黒く、且つ玲瓏として透通る。

白きは町家の屋根であつた。

水から湧いた影のやうに、すらくと黒く煽つて、俣が三臺、つい目の前から駈出した。
——俣が三臺、人が三人——

「待てよ、先刻の紳士は、あゝして、鹽尻で下車たと思ふが、……其とも室を替へて此處まで来たか、俣が三臺、揃つて。」

と見る、目の前へ、黄色い提灯の灯が流れて、がたりと青く塗つた函車を曳出すものあり。提灯には赤い蓋で、車には白い紋で、菊屋の店に相違ない。

「一寸、菊屋の迎かい。」

「然うで。」

とぶつきら棒立。仲屋の小僧と云ふ身の、から脛の、のツぽが答へる。

「おい、其處へ行くんだ、俵はないかね。」

「今ので出拂つたで、」

「出拂つた……然うか。……餘程あるかい。」

「何、ぢき其處だよ。旦那、毛布預ろかい。」

縞の膝掛を函に載せて、

「荷もつも寄越すが可いよ。」

「追剥のやうだな。」

と思はず笑つたが、これは分らなかつた。奴はけろりとして、冷いか、日和下駄をかた

くと高足に踏鳴らす。

「おい来た。」

と出さうとした信玄袋は、顧みるに餘りに軽い。函に載せると、ポンと飛出しさう

であるから遠慮した。

「これは可いよ。」

「然うかね、では、早く來さつせいよ。寒いから。」

ありや、と威勢よく頭突に屈んで、鼻息をふツと吹き、一散に黒く成つてがらくと月夜を駈出す。……

猪が飛出したやうに又驚いて、彼は廣い辻に一人立つて、店々の電燈の數より多い、おほやねの石の蒼白い數を見た。紙張の立看板に、(浮世の波。)新派劇とあるのを見た。其の浮世の波に、流れ寄つた枯枝であらう。非ず、湖の冬を彩る、紅の二葉三葉。

九

「酒を頼むよ、何しろ、……熱くして。」

菊屋に着いて、一室に通されると、まだ坐りもしない前、外套を脱ぎながら、案内の女中に注文したのは、此の男が、素人了簡の回生劑であつた。

其のまゝ、六疊の眞中の卓子臺の前に、と坐ると、早や目前にちらつく、濃き薄き、染色の葉に酔へるが如く、額を壓へて、ぐつたりと成つて、二度目に火鉢を持つて

来たのを、誰とも知らず、はじめから其處に火を装つて備附けられたもののやうに、無意識に煙草を吸つた。

細い煙も峰に靡く。

「お召しかへなさいまして、お湯へ入らつしやいませ。」

「然うだ、飛込まう。」

と糊の新しい浴衣に着換へて——件の胴震ひをしながら——廊下へ出た。が、する／＼と向うへ、帳場の方へ、遙に駈けて行く女中を見ながら、彼は欄干に立つて猶豫つたのである。

湯氣が温く、目の下なる湯殿の窓明に、錦葉を映すが如く色づいて、むくりと此の二階の軒を掠めて、中庭の池らしい、さら／＼と鳴る水の音に揺れかゝるから、内湯の在所は聞かないでも分る。

が、通された部屋は、すぐ突當りが壁で、其處から下りる裏階子の口は見えない。で、湯殿へは大入りしないと行かれぬ。

處で、はじめ女中に案内されて通つた時から、

「此處では酔へないぞ。」と心で叫んだ、此の高いのに、別に階子壇と云ふほどのもの

も無し、廊下を一りして、向うへ下りるあたりが、可なりな勾配。低い太鼓橋を渡るくらゐ、拭込んだ板敷が然もつるりと迂る。

彼は木曾の棧橋を、旅店の、部屋々々の障子、歩板の壁に添つて渡つて來た……其も風情である。

雖然、心覺えて足許の覺束なさに、寒ければとて、三尺を前結びに唯解くばかりにしたればとて、ばたく駈出すなれども思ひも寄らない。

且つは暗い。……前途下りに、見込んで、其の勾配の最も著しい其處から、母屋の正面の低い縁側に成る壁に、薄明りの掛行燈が有るばかり。他は、自分のと一間置いて高樓の一方の、隅の部屋に客がある、其處の障子に電燈の影さすのみ。

「此は、そろりくと參らう。」

獨りで苦笑ひして、追上つた橋掛りを練るやうに、谿川に臨むが如く、池の周圍を欄干づたひ。

他の客の前をなぞへに折曲つて、だらく下りの廊下へ掛ると、舊來た釣橋の下に、磨硝子の湯殿が底のやうに見えて、而して、足許が急に暗く成つた。

ト何處へ響いて、何に通ふか、辿々しく一歩一歩移すに連れて、キリキリノ

と微に廊下の板が鳴る。

ちよろ／＼とだけの流ながら、堤防も控へず地續きに、諏訪湖を一つ控へたれば、爪
下へ大湖の水、鎚をせめて、矢をはいで、じり／＼と迫るが如く思はるゝ。……其の音
さへ、途留むか、と耳に響いて、キリ／＼と細く透る。……

奥山家の一軒家に、たをやかな女が居て、白雪の糸を谷に繰り引く糸車の音
かと思ふ。……床しく、懐しく、美しく、心細く、且つ凄
ト又聞える。

(きり／＼、きり／＼)

きり／＼、きり／＼) ……

十

彼は引据ゑられるやうに立つた。

古の本陣と云ふ構への大きな建ものは、寂然として居る。
客は他にない。

湯に行つた留守か、もの越、氣勢もしないが、停車場から俣で走らした三人の客、其の三人が其處に、と思つて、深く注意した、——今は背後に成つた——取着きの電燈を裡に閉切つた、障子の前へ、……翼を搔込んだ、地を渡る鳥の影が黒く映つた。

小形な鳩ほどある、……

唯見ると、するくと動く。障子はづれに消えたと思ふと、きりきりと板に鳴つて、つるくと這つて、はつと思ふ袂の下を、悚然と胸を冷うさして通抜けた。が、颯と、翠に、藍を襲ね、群青を籠めて、紫に成つて、つい、其の掛行燈の前を抜けた。が、眞赤な嘴、口を明けた。

萌黄色の首がするくと伸びて、車が軋つて、

(きりきり、きりきり)

きいこ、きつこ、きいこ。……

(樹へ行こ、樹へ行こ。)

樹樵來るな、樹樵來るな。きいこ、きいこ。()

と鳴いた。

あゝ、あの、手遊びの青首の鴨だ、と見ると、續いて、追ひ状に袖の下を抜けたのは、

緋ひに黄色きいろに、艶つや々とした鴛鴦をしどりである。

ともに、勾配こうばいにすらくと、水みづに流るゝ、……廊下らうかを迂する。

「何處どこかへ絲いとを引掛けた。」

廣袖どてらへ着つけて女中ぢやうちうが、と、はたくと袖そでを煽あふつたが、フト鳥とりに成なるやうに思おもつて、暗くらがりぞつで悚然ぞつとした。

第一だいいち、身みに着ついた絲いとの、玩弄具おもちゃの鳥とりが、イんだものを、向むかうへ通とほりぬ抜すける數すうはない。

手てを緊しめて、差さしうかゞ窺おもやふ、母屋おもやの、遠とほく幽かすかなやうな帳場ちやうばから、明あかりの末すゑが茫ぼうと届とゞく。池いけ

に面めんした大廣間おほひろま、中なかは四五十疊でふと思おもはるゝ、薄うすぐら暗くらい障子しやうじの數かずの眞中まんなかあたり。合あはせ

目めを細目ほそめに開あけて、其處そこに立たつて、背後うしろに、月つきの影かげさへ届とゞかぬ、山又山やままたまの谷たに々々／＼を、蜘蛛くま

の圍いの如ごとく控ひかへた、星ほしに届とゞく黒くろき洞穴ほらあなの如ごとき大なる暗闇くらがりを翼つばさに擴ひろげて、姿すがたは細ほそき障し

子やうじの立たち棧さん。

温泉いゆの煙けむりに、ほんのりと、雪ゆきなす顔かんばんせ、黒くろ髪かみの鬢まげ。

幻まぼろしの裳もすそに月影つきかげさすよと、爪つまさき先しろ白しろく立たつたのが、花はなの魂たましひのやうな手てをあげて、ちらり

と招まねく。

きりくと、鳥とりの形かたちは柱しらめを繞めぐつた。

其その女をんなは——
——此これに就ついて、別べつに物もの語がたりがあるのである。

青空文庫情報

底本：「鏡花全集 卷十五」岩波書店

1940（昭和15）年9月20日第1刷発行

1987（昭和62）年11月2日第3刷発行

入力：門田裕志

校正：川山隆

2011年9月4日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

魔法鑊

泉鏡太郎

2020年 7月18日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>